

導入事例

株式会社ModelingCafe



コンセプトアートからモデリングまで 3DCGのクオリティと 作業効率の向上を実現



Cintiq 13HD

☑ 導入前の課題

- ポリゴンによるモデリングでは人体やクリーチャーなど有機物の造形に限界
- コンセプトアートに発想の制約

☑ 導入後の効果

- スカルプティングソフトとともに使うことで直感的で微細な造形表現が可能に
- ラフからモデリングまで表現の幅が広がり作業効率も向上
- コンセプトアートの発想が広がりクオリティが向上

3DCGスカルプティングに 液晶ペンタブレット導入

近年、表現媒体を問わず3DCGモデリングの需要が高まっています。映画やCM、アニメーションといった映像のVFX、アミューズメント機器やコンシューマゲーム、ソーシャルゲームのビジュアル、最近ではフィギュアを始めとした造形作品でも、3DCGによる制作は欠かせないものになっています。その3DCGの世界で、ZBrushを始めとしたスカルプティングソフトウェアが登場して以来、スカルプティングによるモデリングは、ラフな造形からディテールを作り込んだ作品に至るまで、特に人体やクリーチャーといった有機的な造形物の制作に欠かせない手法になっています。従来はポリゴンという平面を貼っていくことによって造形を行っていましたが、新たに登場した3DCGスカルプ

ティングの手法では、粘土をこねるように、また彫刻を刻むように、より直感的な操作で繊細な造形作業を行うことができます。これには、ペンを立体的な筆のように扱える液晶ペンタブレットが必須と言えます。ModelingCafeは、3DCGモデリングに特化して起業され、3DCGのモデリングや立体物のデザインにあたるコンセプトアートなど、3DCGの造形に関してワンストップで対応できる数少ない企業です。コンセプトアートの工程でも、作業の効率化と造形物との整合性を高めるために、スカルプティングの手法を採用していると言います。東京本社、福岡支社だけでなくカナダ支社のアーティスト全員に、合わせて数十台の液晶ペンタブレット、あるいはペンタブレットを導入しています。特にコンセプトアーティスト用には、要望の高い液晶ペンタブレットCintiqを導入しています。

手の先の延長線上で立体物に触る感覚で 微細な凹凸まで表現

現在、カナダ支社勤務のトップコンセプトアーティスト山家遼さんにとって、液晶ペンタブレットは手放せないツールになっていると言います。山家さんは、2台の液晶ペンタブレットCintiq 13HDとCintiq 22HDを手に海を渡ったカナダで数々の素晴らしいコンセプトアートを生み出してきました。21歳の頃に3DCGを志し、Autodesk Mayaでモデリングを行うフリーランスとして様々なプロダクションで活躍、その後ModelingCafeと出会って取締役になり、現在もコンセプトアートの最前線で活躍されています。山家さんの3DCGの制作は、まずPhotoshopでラフなシルエットをコラージュのように構築していき、その後ZBrushを使ったスカルプティング作業に移ります。微細な凹凸まで表現する必要があるため、すべての工程でペンの繊細な筆圧機能による表現が可能なCintiqが必須になっていると言います。最初のラフ作成からスカルプティング、最終仕上げまで、単に「ペンを持ち替えなくて良い」という意味以上に作業効率の向上にも液晶ペンタブレットが大きく貢献していると評価します。液晶ペンタブレットに惹かれた理由は、同じ形状の3Dオブジェクトを何個も並べ、ペンで同時にぐるぐると回転させながら作業が出来るといった物理的な制約から開放される点や、アナログの作業に近い操作感のため作業に専念できる点であり「手の先の延長線上で立体物に触っている感覚は世の中に出ているデバイスの中で一番アナログに近い。アナログとデジタルの良さを融合できて表現の幅が広がり、作業スピードも上がる。作業に没頭できますね。仕事でもプライベートでも最早、液晶ペンタブレットがないと生きていけません」と山家さんは語ります。

コンセプトアートでも液晶ペンタブレットが スピードとクオリティの向上に貢献

「3DCGデザイナーの世界ではペンタブレットの普及率はほぼ100%。特にコンセプトアートなどのプリプロダク

ションでは、液晶ペンタブレットを使ってスピードとクオリティを上げているケースが多いのでは」と語るのは代表取締役の岸本浩一さん。同社は、元々の3DCGモデリングの仕事から、徐々にコンセプトアートの段階からの依頼が増加。それに伴ってコンセプトアートのチームを設立した際に、アーティストから強い要望があったことが液晶ペンタブレットの導入のきっかけになったと言います。最近では3DCGの現場で、ZBrushと他の3DCGソフトウェアを併用することは珍しくなくなり、3Dペイントも進化しているので、クオリティを保ちながらスピードアップを図るために、今後ますます液晶ペンタブレットの役割が重要になってくると感じています。同社は、日本に限らず世界に通用するような3DCGを生み出していくことを目標としており、そのためには最新のツールを積極的に導入しクリエイティブに没頭できる作業環境を整えていくことが必要と考えています。「液晶ペンタブレットを導入してからは、発想が制約を受けていない良いコンセプトアートがどんどんと現場スタッフから湧き出てきて、格段にクオリティも上がり、正直導入以前にはもう戻れません。良い作品を生み出すことで、指名での依頼も増えました。コンセプトアーティストと3DCGモデラーが同じチームに在籍し、同じツールを使うことで、密接にスピーディにやりとりができコミュニケーションコストが圧縮されていますので、全体的な生産性が飛躍的に向上しました」と岸本氏は語ります。今後、液晶ペンタブレットは、コンセプトアートからモデリングまで3DCGにおいてますます重要なツールになっていくでしょう。

